2018年3月10日
第37号

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

特定非営利活動法人

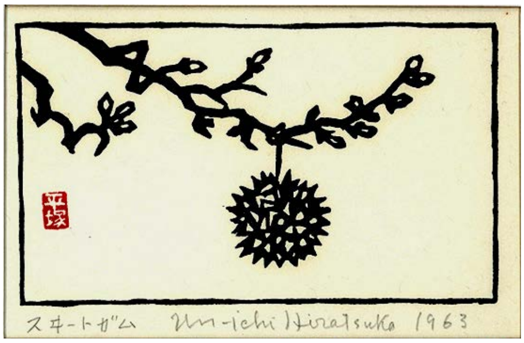
縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 37 号

日本犬の地方的呼称について　五味靖嘉……………………………………………………2
シバの散歩道(36)　根深　誠　…………………………………………………………7
おたよりコーナー（ML 交信から）……………………………………………………10
クマ対策への犬の活用、イヌの舌斑、成長しましたよ
おいで！と言っても戻らない、犬の認知症？
東淳樹、五味靖嘉、土井下千明、大岡早苗、岡村智鶴
向井亮太、佐々木俊幸、
2018 年度総会・理事会案内………………………………………………………… 15
事務所報告　☆新入会　☆会費　☆仔犬登録　☆寄贈………………………………16



総会・理事会案内と交流会案内について

4 月 21・22 日に、「白石湯沢温泉やくせん」にて 2018 年度総会を行います。
今会誌には、総会・理事会の出欠ハガキを同封しています。必ずご返信ください。ＮＰＯ法人の規定に基づき、総会の成立に参加者数と委任状数の記載は欠かせません。欠席される場合でも委任状の返信をお願いします。

◆次号会誌 38 号発行は 2018 年 6 月 10 日予定。原稿の締め切りは 2018 年５月１日です。

お便り募集

会誌を楽しく親しまれるものにするために、皆さんのお便りをお待ちしています。お気軽に原稿をお寄せください。また、スマートフォンやパソコンでメールをされている方は、メーリングリスト（縄文ひろば）にご参加ください。参加ご希望の方は事務局（会事務所）に連絡ください。
また会誌編集者として協力いただける方も募集しています。ご協力ください。

☆会誌の原稿は、会事務所に郵送、又はメールでご送信ください。ぜひ、愛犬の写真も添えてください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター
会事務所：〒014-0073　秋田県大仙市内小友字堂ノ前 119 番地 5　☎0187－68－2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp
郵便振替口座：　02280－2－106951

栗園を守る縄文柴犬

仔犬たち

ＪＳＲＣ諸料金一覧

会　費	・　入　会　金		1,000 円
	・　年　会　費		5,000 円
登録料	・　血統書発行	一頭	1,500 円
	・　犬　舎　名		2,000 円
	・　登録再発行	一頭	1,000 円
	・　単　独　犬		2,000 円

血統登録について

①. 仔犬が生まれた方は御一報下さい。（用紙送付します）
②. 申し込みには登録料が必要です。
③. 血統登録、犬舎名登録は五文字以内で、漢字には必ずふりがなを付けること。
④. 両親犬のカラー写真（5×6 ㎝以上）を添付。
⑤. 二週間以内に、カラー印刷で発行しております。

日本犬の地方的呼称について（1930 年ころから）

五味靖嘉

〔お断り〕

1996 年の冬、小山宏博士（北群馬渋川郷土館 館長）の《『日本犬の地方的呼称とその区分』》について、私の持つ情報を加筆し編集を加え、会誌に公開する約束をしていながら中々その機会ができませんでした。そんな経緯があって数年前のある日、小山博士は東京でオオカミフォーラムの場所や日程まで決めたとの知らせの電話を私ともやりとりしていました。ところがその翌日突然倒れられたとの知らせがあり、それから間もなく

故人となられました。私は表記の課題が気になっており、それが今頃になったこと、数年前に旅立たれた博士に、心からお詫び申し上げなければなりません。と同時に、不充分ながらも会誌に掲載するところまでこぎ着けましたことをご報告申し上げます。（2017. 12. 4 記）

〔はじめに〕

以下の表の大部分は小山宏著「天然記念物日本犬（1985）」の資料から引用し、小山氏と協議し、私の判断で部分的に整理・追加・削除などの修正を加え、表も並び替えて表記の目的に沿えるよう私なりに努 力したものです。

本資料は、日本犬として各地に残されていた「呼称」の調査、記録の紹介を目的としたものです。従って、「天然記念物指定」の日本犬とは全く無関係に表示されます。また、現存する日本犬を扱う各犬種団体の犬たちとの関わりを提示する事を目的としたものではありません。

ところで、「日本犬の定義」は必ずしも明確ではありません。従って、当然の事ながら考古学・生化学・形態学・人類学・生物学、等々の専門家による研究は不可欠となります。そうした研究の積み重ねの上に最近では、多くの顕著な成果が挙げられているのは周知の通りです。言わば科学的な根拠を持つ「日本犬像」については、この資料の内容と無関係である事を、加えてお断りしなければなりません。

日本在来犬の保護については、大正時代の始め東京帝大理学部名誉教授の渡瀬庄三郎博士により最初 に呼びかけられたと、後に日本犬保存会の創立に着手した斉藤弘氏は述べています。そして、昭和３年６月に日本犬保存会の創立が発表されました。この資料に含まれるのは、その当時とほぼ同じ時代からの呼称である点に注目していただきたい。そして、以後、現在までの期間に多くの在来日本犬呼称が消え去った事は一体何を物語るのでしょうか？実は、その問題こそこの資料を提示する目的であると考える一方、様々な事柄を謙虚に学ぶところがあるのではないかと考えます。

小山博士も述べておられるように、全国各地の伝承的な問題だけに、その内容の不充分さはやむを得ないと考えます。しかし、こうした資料を残しておかなければ、やがて消え失せるのは時間の問題だと判断しています。従って、これからの課題としては、多くの読者諸氏からの伝承・情報や御教示をお願いしたいと考えています。

〔資料の修正について〕

１）表題について 出典の表題では《『日本犬の地方的呼称とその区分』1.現生犬・伝承記録の犬の区分、2.古代ニホン イヌ・イヌ科動物の区分、3.近似種、4.補遺》となっており、更に、《『日本犬の地方的呼称と区分、補遺Ⅰ》が加わります。

この中で、今回整理・引用させていただいたのは前記 1.と4.及び同表題、補遺Ⅰの部分から前記で述 べた主旨に沿った内容を中心に、私の調査した情報を加えまとめさせていただきました。

改題した理由の第一は、小山氏の原文のままでは無い、と言うことです。第二は、出来るだけ「日本の犬」に限定ししました。第三は、ここで扱う限度を大雑把に明治時代以降の「伝承的」要素とした事です。第四に、本記録は現在飼育されている犬を対象としていません。第五に、各地域性を重視する、と言う点を分類上優先しました。

２）表の「項目」について　原文の項目では左から、名称・総称・型別・分布・生息（飼育）地・生息（飼育）年代・用途・特記事 項その他、となっていましたが、読みやすくするために「呼称」となった地域性を優先しました。また、項目の右「特記事項その他」は単純に「備考」とし、呼称に関わりのある点に絞りました。

３．「削除」について　表中で不要と判断した犬種団体名などは、特別扱いのような誤解を招く恐れがあるので除外しました。

４．※印＝「加筆」について　私の調査・記録などを表中に追加し、それぞれの部分には※印を付け区別しました。

〔謝辞〕

本資料の掲出にあたり、故人となられた原著者小山氏のご快諾を賜り、かつ、多大なるご協力やご教示 を戴きましたことを深く感謝し、同時にJSRC 諸氏へのご報告と致します。

初稿 1996 年２月 10 日・最終稿 2017.12.4

柴犬研究所　五味靖嘉

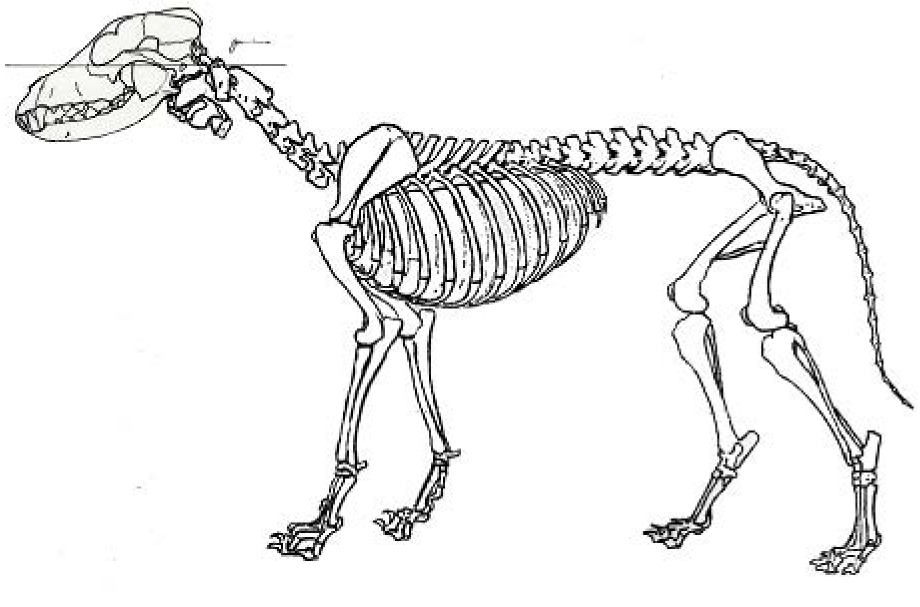
日本犬の地方的呼称について（原資料 - 小山宏）　改題　五味靖嘉

分布	総称	名称（系統）	型別	生息（飼育）地	生息（飼育）年代	用途	備　考
北海道	北海道犬	アイヌ犬 ・千歳系（岩三沢系） ・厚真系 ・日高系（平取系） ・阿寒系 ・渡島系	中 小	北海道各地（系統）および全国	～昭和 27 年～	狩猟用（エゾシカ、ヒグマ、エゾタヌキ） 番犬 愛玩犬	・アイヌ犬を近年では北海道犬という。千歳系、厚真系などが残されているが、多くは各系で混交されている。 ・岩手犬に似ているという。
東北	岩手マタギ犬 マタギ犬	津軽犬 マタギ犬 御所犬 沢内犬 巻堀犬 岩手マタギ犬 東北マタギ犬	中 中	・奥羽山系 ・岩手県和賀郡沢内村辺 ・雫石・西山 ・御明神・御所	～昭和 13，14 年 ～昭和 40 年代初期まで少数残存	クマ、カモシカ、小獣類	・昭和 33 年頃、北海道犬と交配すすむ。群馬の十石犬とも交配された。一部兵庫の猪犬として、末年は小岩井農場から茨城県へも輸送されたという。(現地調書 56)（元岩手大農学部長工藤勝四郎氏教示）
	秋田犬	秋田犬 鹿角犬 大館犬 秋田マタギ犬 中型秋田犬	大 ※中	※秋田県 ※秋田県仙北辺	※～戦中まで残存（昭和 19 年） （大正～昭和）	※クマ、カモシカ、小獣類	・南部藩鹿角辺のマタギ犬を基礎に大館、花輪近辺で大型化 鹿角犬したもの ※「秋田マタギ犬」は戦中まで（後藤氏談ー角館在住）。
	高安犬 福島地犬 南会津犬	高安犬 福島地犬 南会津犬	準大型 中 中 中	・岩倉、南置賜郡（大正 14 年）に白赤毛の犬がいた。 ・山形県東置賜郡高畠町上和田高崎啓一家 ・福島県若松市五枚沢、耶麻郡加納村 尾瀬沼、檜枝俣	昭和初期滅亡が定説。昭和 12・13 年ごろの 4 代目に当たる高安犬が生存という。 ～昭和 9 年～	番犬 愛玩犬 猟犬	・昔熊猟使役の犬は虎毛、茶ゴマで甲斐犬の様でもあったという。今回発見のものは体長 1m体高 50 ㎝顔丸く両耳立ち巻尾、背中薄黄色、腹白、6 才のメス、仔犬 10 匹（山形新聞 58） ・赤毛 1 尺 6 寸巻尾鼻黒、赤毛 1 尺 8 寸尾太 ・体高 2 尺位、尾瀬沼の近辺、檜枝俣付近にかけて 1 尺 5 寸の犬もいた。
関東	十石柴	十石犬（群馬） 利根犬（群馬） 赤城犬（群馬） 秩父犬（秩父鹿犬） 黒坂石犬	中小 中小 小 小中	群馬県多野郡 群馬県利根郡 群馬県勢多郡 埼玉県（浜平・塩沢・栃本・三峯） 栃木県足尾	～昭和 30 年代 ～昭和 32 年 ～昭和 30 年 ～大正末期激減 昭和 8 年少数残る 絶滅	イノシシ、シカ 小獣類、シカ 小獣類 シカ、イノシシ、小獣類 小獣類	※斉藤弘氏が日保会報に報告記録。※また、小山著 1985「天然記念物日本犬」に記述がある。 ・奥日光のマタギ犬と交流があった。(元北海道大学農学部長内田登一氏教示。） ・栃木県足尾から東南三里の山中の部落の犬、鉱山の開発で 野獣が減少したため、日清戦争前後に根絶した。代わって柴犬が飼われた。
北陸	※越の犬	越後犬 越後柴犬 越の犬（越中犬） 立山犬 (能登系、白山系あり） 大野犬 能登犬	小 中	新潟県 富山県高岡市 富山・石川・福井一円	昭和 9 年		・越の犬文部省天然記念物調査員鏑木外岐夫氏命名。 ※赤毛が多く、野獣の面影を残している（鏑木） ・越中の奥谷、黒部、立山などの山岳猟犬。 ・「愛犬ものがたり」
中部	甲斐犬	甲斐犬 甲斐虎毛犬	中小	山梨県中巨摩郡芦安村、西山村、平林村、宮本村、九一色村、西保村（指定申請記載地）	昭和 6 年～11 年に至り保護運動起こる～	カモシカ、シカ、クマ、小獣類、鳥類	・肩高 1 尺 3 寸～1 尺 7 寸、体重 3 貫～6 貫。舌に黒斑あるもの少なからず、飛節発達し、尾は差、巻で毛は粗毛、黒虎毛、虎毛、赤虎毛の区分あり。江戸時代御犬として記録あり 猪犬型、鹿型あり。 ・山梨県を中心に関東に分布。
	※信州柴	信州柴犬（長野地犬）	中小	長野県一円		小獣類、昔はイノシシ、シカ猟、鳥猟	※小型（柴犬）の基礎犬の一つ。(戦後は山梨の小型犬や島根の犬、和歌山・愛媛の犬なども交流した。）
		川上犬	中小	長野県南佐久郡佐久市周辺	※戦中に絶滅		※中・小型が戦後復活したという。ゴマ毛多く白毛もいた。
		保科犬 戸隠柴犬 山辺柴犬 木曽柴犬 赤石柴犬 天竜犬	小 中小	長野市善行寺山中 松本市東方山辺 北アルプス山中 赤石山系 長野県飯田辺り			・「愛犬ものがたり」 ・長野県天龍峡の獣猟犬、黒犬の系あり、肩高 1 尺 8 寸～1 尺 4 寸の犬あり毛質あらかった。
	美濃柴 猪犬 熊犬 鹿犬	天城犬 美濃犬 岐阜犬	中小	美濃飛騨の山 岐阜市、稲葉、本巣、安八～羽島	明治中期減 昭和 9 年頃残存少数	イノシシ	・山岳地帯から姿を消し、平坦部の岐阜市辺の愛好家犬となる（日保昭和 9 年岐阜県調査記）美濃柴。

		飛騨犬（柴） 和良犬		岐阜県和良村			・赤毛が多かった。岐阜県和良村の地犬、郡上八幡にも分布していた。
	三河犬	尾張犬 三河犬（三河日本犬） 三河南郷犬 三州三河犬（三州犬） 三河チャウチャウ 三州犬 駒平系 大内山犬 かばた犬	 中小 中小 中小 中小 中 中大	愛知県三河郡南方 三重県熊野川沿い紀州との境 三重（川俣谷）	大正～昭和 昭和 10 年頃 昭和 10 年～（三河南郷犬） 昭和 10 年～ ～昭和 10 年～	愛玩犬 イノシシ イノシシ、シカ イノシシ	・「中型日本犬」「柴犬」などとも呼ばれた。赤毛一枚、総黒爪、黒マスク三河犬混血の秋田犬を呼んだ。 ・三河犬は中型の混血犬。 ・渥美郡の大久保、幡豆郡杉田氏などが繁殖したという。眼頭の黒い毛が直線的に現れている特色があり、鉛色の舌斑、顔面に黒色多い。 ・松阪・堀坂山麓の猟師。 ・紀州犬に吸収？紀州犬の二大支流といわれる。熊野川沿い紀州との境 ・体高１尺８寸、青山高原の辺りにも分布。
近畿	紀州犬	紀州犬 高野犬 明神犬 明神犬（立神犬） 平山系 太地犬 太地黒 熊野犬 　門系 　黒猪犬	中 中 中 中小 中 中	和歌山県一帯 和歌山古座川 和歌山、太地、勝浦、下里の間、太地と同然（和歌山） 熊野市	～昭和９年～ 10 年頃	イノシシ、シカ	・戦前は有色犬が多かったという。色は黒、ゴマ、虎毛、ブチ、白、灰かす色など多様。 ・タテガミのある犬もいたという。灰黒毛（黒）ヌタ毛で狼色、那智赤。 ・田辺市にある大塔山の谷峡で拾った和歌山の地犬 ・捕鯨地海辺に集まる野犬を繁殖した（日保会誌、昭和９年） ・熊野川沿いの犬をいう。紀州犬といえば、太地犬と熊野犬をさすという。紀州犬命名、石原謙氏。 ・猟師門英次氏が繁殖。
	紀州地犬	日高犬 和歌山犬 紀州柴犬 弥九郎犬 鳴滝犬 原ニホンイヌ（シマ山犬） 柳生犬	中 中 小 中 中 中	日高（和歌山） 和歌山新宮 那智山麓色川村 和歌山県 奈良県奈良市柳生地方	昭和 18 年以前 昭和 28 年頃	イノシシ イノシシ イノシシ イノシシ	・中型が有名、小型のもいた。 ・伝説の犬。坂本部落（西畑氏）に残った血を受け継いだ。 ・和歌山県村上氏らが山出した犬という。拾得された頭骨に古代犬類似の形状を示すという。一時保存会がもたれた。昭和 50 年頃。 ・尾太く全体的にしっかりした骨組み。猟師間の系統的な選択交配という（狩猟界、1981.8）
中国	山陰柴犬	山陰中型 山陰虎班犬 石州犬 石州柴犬 伯州犬 因幡犬 山陰小型犬（柴犬） 島根犬 山犬 鳥取柴犬	中 中 小中 小 小 中 小 小	島根県（岩見） 同 鳥取県（伯耆） 鳥取県（因幡） 鳥取県 島根県郡賀郡杵野坂峠 平田峠 鳥取県鳥取市	～昭和８年～絶滅	※鳥猟 イノシシ	・紀州犬に吸収か？ ・被毛荒い、体格は紀州犬より小さく、白色犬は少ない。赤 ゴマおよび虎毛がいた。 ・赤色の冴えた毛色をもっていたという。（※山陰柴犬） ・同上 ・同上 ・山陰柴犬として地方的特色を保有して残されていて、日本犬中、特異な地方的遺伝子構成をもつという。※小型柴犬。 ・濃茶色、淡赤虎毛、赤ゴマ、赤。 牝犬を好んで飼育、牡は野犬接触による自然交配（日保会誌）。 体高１尺４寸５分、重心がひくい骨太の犬、短尾もいた。尾太 くたくましい。耳小さく巻尾、ムク毛、まれにいた小型犬は赤、黒、淡赤、ゴマ、白は少ない（昭和９年日保会誌） ・細身で軽快なタイプを保有しているともいわれている。
四国	四国犬	阿波猪犬 四国犬 幡多系 カモの犬 近守 木頭犬	中 中 小	徳島県 高知県、愛媛県 徳島・高知 徳島・高知の地犬	～昭和初期絶滅 昭和初期～	イノシシ、シカ	・祖谷阿波の犬（剣山北麓） ・石槌山の南面、脊梁山南麓の本川産、細身、ゴマ、黒四ッ目もいた。 ・石槌山の西南の幡多系、首太く骨量ありゴマ毛も多い。 ・愛媛県周桑郡も産地であった。 ・徳島・高知の道すじに残った犬 ・小さい犬

		土佐の犬（土佐犬）		宇和島		猪犬(シシザキ)	・徳島・高知の地犬 。 ・シシザキなど用途別名称あり。猿先、狸先、兎先の名称もあった。小型は柴犬に吸収されたといわれる。
		須崎の犬（城山統） 古須		土佐、須崎			・土佐須崎の集団地犬のこと。四国犬の祖犬。（注１） ・虎毛もいた。
		安芸の犬（海部犬）		安芸地方		イノシシ、シカ	・高知県安芸の犬 ・徳島に近い野根山の峠付近の野犬を家畜化したものといわ （海部犬） れる。差し尾でシカ犬タイプ。四国犬に吸収。
		本州系（えりもん）			～昭和 15，16 年頃		・長春系の主流。愛媛県境の分教場の教師が飼育していたのが祖犬という。80%が黒毛。石槌山の奥深く、花崗岩の岩肌を自在に走っていた。
九州	※肥後犬	肥後狼犬	中	熊本県球磨郡（大分県、福岡県）			・球磨郡白髪山で発見という。披毛の斑紋が異なり、犬より狼に似るという。(※全国紙で話題にもなったが疑義のある犬)。
		肥後犬（阿蘇犬） 大隈猪犬	中	鹿児島県大隈、五箇荘、椎葉			
	薩摩犬	薩摩犬	中	※南九州（鹿児島辺）	※大正末期滅～	※イノシシ、シカ	※鹿島村の野犬に、昔の薩摩犬に似た犬を捕獲して復興を目指している（鹿児島・獣医師肥後氏 1990.9）
		宮崎犬					・赤黒の毛色、薩摩犬と同系。
	日向犬（新田犬）	日向犬 椎葉犬 川内犬 新田犬	中	宮崎市、日南、小林、延岡、南郷村、北郷村、児湯郡	昭和 40 年末～	イノシシ	・赤、赤白、ゴマ、一胎中 2～3 頭は半垂れ耳の犬が生まれる。(※南郷村ー新田氏・狩猟界 81.6)
	鹿犬	屋久犬 ※（屋久島犬）	中小	屋久島下屋久村、安房、永田、宮浦、尾の間、栗生	～昭和 10 年頃 ～昭和 27 年～	シカ、番犬	・体長 50～55 ㎝、体高 45～50 ㎝、四肢細く長く軽快なタイプ、 頸長くない。頭蓋広く、吻は鋭い。ストップ浅いが明瞭、耳立ち悪い、下毛は発達しなく、赤毛、ゴマ毛（1952 愛犬の友）。(1950 生年頃に近い年代に移入されたもの（同上「屋久犬の現勢」著者教示、1979）
	沖縄地犬	※琉球犬 猪犬	中小 中	沖縄県国頭地方 沖縄本島北部	1948 年	イノシシ、猟犬 イノシシ、猟犬	・黒色、立耳の犬がいたといわれる。 ※毛色は黒、トラ毛など、甲斐犬の雰囲気に似ている。

注１：須崎の犬の祖犬は、城山統・古須が影響した。城山統とは、須崎の城に生い茂って昼間でも暗い所を本拠地に住み着いた野犬で、人家の家畜を喰い殺してい た。朴（ほう）の川の連山に棲息していた犬が祖犬といわれ、神社に奉納された絵馬にも描かれている。恐ろしいイヌという伝説的に扱われた。



イヌの全骨格

シバの散歩道(36)

根深　誠（文筆家・釣り師・元登山

年齢を重ねるにつれ、聞き分けのない、わがままな振舞をするのは人だけではなさそうだ。もちろん、人が全員そうであるとはかぎらない。むしろ年の功で、老人であればあるほど分別を身につけるのが普通のような気もする。しかし、その一方で現実には、心身ともに各種機能が衰えて不審な行動をとる人も少なくはない。

認知機能が衰えて、何度も同じことを繰り返し聞いてもすぐに忘れてしまう。足腰が弱まり、腰の曲がった前傾姿勢のガニマタ、摺り足歩き。排尿がちかい、手足の痛み・痺れ、視力・聴覚の衰え、疲れやすくなった、他にも、さまざまな障害を感じるのは私だけでなくいるはずである。

いちいち具体例を挙げればキリもないが、幼児はともかく老人のわがままはボケ、つまり老耄と関係しているのではあるまいか。何ごとも諦めが悪く、しつこく要求する。シバとつき合っていて、そのことをわが身と重ね合わせ、痛感するようになった。老いるに従い、各種機能が緩み、バランス感覚にしても思うに任せない。シバは四足なのに、雪道で足を滑らせ転んだりする。転んだら立ち上がろうとするのは、それが生きている証なのだから、ボケてわがままな振舞をする老人にたいしても寛容であるべきではないかと、ちかごろそういう気がしてきた。老人のわが身にして敬老の精神である。

今年は戌年。シバの年賀状

眼をほそめ　雪にうずもれ　春を待つ
雪よもっと　降れよふれ　降りつもれ

シバは平成 16 年 7 月 5 日が誕生日、ことし 14 歳になる。老犬であり、あと三、四年ぐらいは長生きしてもらいたいと願っているのだが、ときどき散歩中に音をたてて放屁したりする。うーむ、シバも老人になったかと思わずにはいられない。犬だから、不本意ながらついうっかりなどという羞恥心があるのかどうか、そのあたりの事情は聞くこともできないのでわからない。

人の場合、放屁しながら平然と構えて、羞恥心も自覚も失ったのではないかと思われる、の例があった。

妻を亡くした老夫が葬儀の席上、僧侶の読経のさなか、読経の節回しの間隙を縫うかのような際立った音色で放屁した。遠くで聴く豆腐屋のラッパのような音色だった。それが思いのほか、長く感じられた。勢いがなく細々と、三、四秒はつづいたかもしれない。

あとで私は想像したのだが、放屁にたいする認識はなかったのではなくて、たぶん認識はあった。伴侶として長年暮らした妻の死という人生の厳粛な局面で、しまった、と一瞬、思ったが、なにせ緩んでいるから止めることができなかった。抑えようと努力はしたものの、どうにもならなかった。せめぎ合いがつづき、それで長かったのかもしれない。

私のすぐ傍にいたので、それとなく覗き見たのだが、本人は至って神妙な面持ちだった。

できることなら、人前では憚るのがエチケットである。もちろん、排尿や脱糞も同様だろう。なかには酩酊激しく、そのエチケットを守れなかった酔漢もいた。臭くてひどいものだった。

※　　※　　※

シバの老いに気づいたのは、前号でも触れたが、去年の夏ごろだ。老いとは直接関係あるのかどうか知らないが、股間に膨らみができた。重大な異変なのかもしれない。秋になって急激に痩せはじめた。げそげそに痩せている。触ると骨がごつごつしている。明らかに病気のように思われる。しかし、その割りに食欲は旺盛で変わらない。日に二食だが、一食分の量は人と遜色ない。もしかしたら私よりは多いかもしれない。

股間にできた膨らみをシバも気にしているようだ

人の場合と異なり、被毛に覆われているから顔を

見て判断するというわけにもいかない。他に変わった点といえば、首の周りの毛が抜け落ち、そのうち生えてくるのではないかと思っていたが、年が明けても生えてこない。

雪の降る中で、下半身が小刻みに震えているのを見るのは如何にも寒そうだ。以前飼育していたコロは、シバより被毛が長く、もともと捨てられた幼犬を育てたのだが、冬でも小屋の外で雪をかぶって寝ていることがしばしばあった。

シバはそうもいかない。国の重要文化財に指定されている江戸時代からの旧家で生まれ、生後三ヶ月でわが家に来るまで、大きな家の中の広い土間で育っていた。そのせいか、克己心に欠けているような気がしないでもない。何かと私を当てにしているようで助けを求めてくる。

そういうことで冬は、ともかく寒くないようにとの思いから、厚手のハッポースチロールの板を小屋の床に敷き、そこに置いたダンボール箱の中に、使い古した敷布やカーペット、タオルケット、毛布、セーターなどを交換しながら入れ､寝床にしている。汚れると、そのままゴミに出して捨てることもできる。

今年の初雪。向こうは、散歩コースから見る久渡寺山

大寒に入り、雪が降りつづくとさらに寒さが身にしみるだろうと案じて、湯たんぽを入れることにした。夕方の散歩を済ませたのち食事を与え、そのあと暗くなってから、以前私が使っていた湯たんぽに熱湯を入れ、タオルケットに包んでシバの寝床に入れる。気に入っているようだ。

「よし、よし、これでがまんしてくれ」

本来であれば玄関にシバを入れればいいのだが、なかなかそうもいかない事情がある。

以前は夜、玄関に置いたダンボール箱に寝床をつくり、入れていた。夜中に用便したくなると戸を引っかいて知らせるので私が起きて開けていた。しかし、がまんができなくなったのか、その場に撒き散らしていることもあり、悪臭がするなどと家族の、私からすれば冷酷な顰蹙を買うようになった。これがやむなき事情である。

理想をいえば、飼犬の居場所にも配慮した家の構造であればいいのだが、何しろ安普請の建売住宅だから如何ともしがたい。実際、犬どころか、家のつくりを見ると、雪国でありながら、積雪にたいしてまったく配慮を欠いている。気をつけて周囲を見回すと街のつくりにしても同様である。もう少し、雪国らしい街づくり、今様にいえば都市計画とでの言うのだろうか、環境と一体となった住みよい社会を理想に掲げてほしいものである。

もっとも、こうした苦情を口走る市民が厄介者として扱われるのは重々承知している。経験済みだ。これまでも散々とり上げてきた「犬猫看板」や「ゴルフの打球」の問題にしてもいい加減にあしらうだけで、これでよし、というような改善は見られてはいない。「犬猫看板」については一部の公園で、飼犬をつれて散歩できるという旨の看板を設置しているが、相も変らぬ「上から目線」であり、撤廃されてはいない。

「ゴルフの打球」に至っては、まったく改善の兆しはない｡いまだにネットを越えて飛んでくるので、遊歩道の散歩者は危険にさらされている。たまに天気のいい日に足を延ばしてみると、田んぼや遊歩道のわきに散乱するゴルフ球が目につく。

私は以前、執拗に、この問題を地元紙に投書したり、ミニコミ誌に連載したりしたのだが、飼主もあまたいるだろう市民からも行政からも黙殺され、挙句の果て、「そんなに嫌な故郷なら出て行けばいい」という極めて歪な反応が返ってきた。

朝の散歩で見かけた除雪車。日の出前に散歩に出る

ふるさとの何をか言はむやろくでなし雪降りしきる冬がまた来る

※　※　※

仕事がら上京したり、何処か他郷へ出かけたりすることがあると、街並や公園に関心が向くのは、長年の「シバの散歩道」で培われた習慣なのだと思う。

先日、上京したのだが、大学時代からの友人知人

も多く、旧交を暖める上でも、たまには一杯やるかということになる。仕事の打ち合わせはだいたいが午後であり、飲むのは夜だから午前中は手持ち無沙汰になることが多い。

私にとって、そういう時間を潰すには上野公園が適している。散歩もできるし、見学施設もいろいろある。国立西洋美術館には上京の折、つとめて行くことにはしている。美術に興味があるわけではないが、鑑賞者が疎らにいて、どこか気取った館内の雰囲気を私は好んでいた。

その気取った雰囲気の洗礼を受けたあとで、アメ横や御徒町界隈の雑踏でビールを一本飲みながら昼食をとり、余韻を味わう。これがささやかな愉しみでもあった。ところが意に反して、今回は大混雑、「北斎とジャポニスム」展が開催されていた。入場してから失敗したと後悔した。しかし、後の祭り。作品をまともには鑑賞できないほどの行列だ。

長野県の小布施に行ったとき北斎の作品を見たことがあったが、それが目的で小布施に行ったのではなかった。今回も、特別展を目当てに入場したわけではなかったから、予想外の混雑ぶりに辟易し、早々と退散した。

入口付近にある売店にも多数の客が殺到していた。いつもなら絵葉書を二、三枚買い求めて、ベンチにでも腰かけ、遠くの友人に便りを出したりするのだが、そういう気分にもなれなかった。こりゃ、もう逃げ出すほかない。

外の広場に出て清々した。飼犬同伴の散策者を眺めていたほうが気分も晴れる。

上京時は、たいてい三泊四日滞在することにしている。上野公園以外にも散策するコースがあり、隅田川沿いの宿から、いつもは川沿いの遊歩道を歩く。今回は晴海埠頭まで足を延ばした。2020 年の東京オリンピックを控えてか、各種関連施設の建設工事がはじまっていた。

隅田川の川べりにある公園で見かけた看板。

晴海客船ターミナルには人影がなかった。どうしたものかと訝しく思い、掃除中の年配の男性に尋ねると、今日は日曜日ですからと言う。なるほどそういうことかと納得したものの、曜日に関係なく日々を過ごしている自分が空虚に感じられた。

人気のない館内のドアには「ペットとご一緒に入館することは、ご遠慮ください」との注意書きが貼られてあった。弘前市の「犬猫看板」と異なり、抵抗は感じない。

「あれが、いま問題になっている豊洲市場ですか」入江の対岸につらなる建造物を眺めながら掃除中の男性に話しかけた。

「そうです。いまは人っ子ひとりいませんよ。どうなることやら」

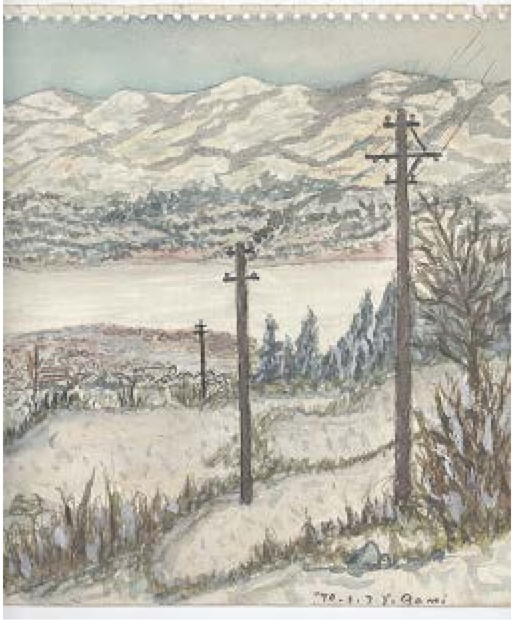
帰途、隅田川の遊歩道を歩いた。仔犬を抱いてベンチに腰かける人。飼犬をつれて散歩する人。いっしょに駆けている子供。今年は戌年である。愉しそうにともに遊んでいる一方で、殺処分される捨て犬もいる。

それぞれの飼主にしてみれば、心の拠り所として掛け替えのない存在なのではないのだろうか。私の経験では、留守中、気がかりなものである。互いに年老いてくるからなおさらだ。寂しがっているに違いない。

案の定、帰宅した私に、大声を張り上げてジャンプし、絡みついてくる。

「よし、よし、大丈夫、大丈夫。安心しろ」

声はりあげ小屋を飛びだしがむしゃらにシバ駆け回り嬉しさのゆえ



2018年度

総会・理事会のご案内

ＪＳＲＣ理事長　橘　宏

日時：**４月２１日（土）～２２日（日）**

会場：**白石湯沢温泉やくせん**

宮城県白石市小原字八幡前 19－1

電話：0244-29-2620

宿泊費：10,000 円（一人）

《交通案内》

列車：東北新幹線　白石蔵王駅下車
バスに乗り換え→（30 分）→六角バス停下車、徒歩 15 分

車：東北自動車道　白石 IC より 30 分
東北自動車道　国見 IC より 15 分

《総会・理事会の次第（予定）》

4 月 21 日（土）13：30～17：30　理事会
17：40　夕食。入浴後、懇親会

4 月 22 日（日）　7：00　朝食
8：30～11：00　総会
終了後、現地解散

会員の皆様

ＮＰＯ法人縄文柴犬研究センターの 2018年度総会を左記の要領で開催します。

理事会は理事以外の方も参加いただけます。総会は自由に意見を交換し合い、一年間の活動方針を決めます。ぜひご参加ください。

総会参加費は無料ですが、宿泊して懇親会に参加される方は一人 10,000 円の自己負担になります。

総会出欠ハガキのご案内

◆会員の方には、委任状のハガキを同封しました。必要事項をご記入の上、3 月 25 日までに投函して下さい。

◆役員でなくても、理事会・総会には出席できますので、ぜひご参加ください。なお、出席が複数名になる場合は、その旨を余白に記入してください。

◆出席できない場合でも、事業計画など皆様のご意見やご提案をお待ちしておりますので、ハガキの余白、あるいはお手紙、メールなどでご自由にお寄せください。

◆宿泊ご希望の場合は、はがきに記入ください。宿泊は一泊 10,000 円です。

◆懇親会出席の方は、各自お国自慢の一品と飲み物などをご準備ください。参加者みんなで賞味します。

◆不明な点は、センター事務所までお問い合わせください。

会場案内ルート